

## 奥出雲仁多米特別栽培米 スマート栽培マニュアル

### ◆ 栽培目標

- ・多収を第一とせず、粒張りの良い玄米生産を心掛け、安定した「仁多米」ブランドの維持を図るため、今後も需要のある減農薬、減化学肥料栽培によるコメ作りを行い、環境負荷の低減並びに省力化を図る。
- ・「水位・水温センサー」を導入することで、モニタリングすることが出来、手間を省き、省力化を行うことと適正な水管理による、的確な作業実施により品質向上につなげる。
- ・「AIカメラ」による生育状況の把握並びに記録データを活用し、各年の気候や生育状況に応じて、追肥、防除、刈取など適期肥培管理を行う。
- ・収量コンバインによる刈取により圃場毎又は圃場内の収量を把握し、翌年の施肥設計に活用する。
- ・基肥、追肥においては、「AIカメラ」「衛星写真」「収量コンバイン」等で蓄積したデータを活用し、肥料の投入量を調整し化学肥料の投入量低減を図る。
- ・施肥や防除については、ドローン等を活用し、省力化を図る。

### ◆ 土づくりと圃場確認

- ・前年作の収穫後の圃場確認を実施して、出来るだけ乾田状態になるよう整備する。
- ・仁多米堆肥センターなどの完熟たい肥を粗大有機物として概ね1 t程度施用する。（土壤診断の結果を考慮）
- ・稲わらの腐熟の不足が考えられる場合は、腐熟を促進する方策を実施する。（秋耕しや腐熟促進資材等）
- ・品質低下を防ぐことと健全な根張りの稲体とするため、土づくり資材の使用は必須とする。

### ◆ 健康な苗づくり

- ・種もみは無消毒種子を使用して、温湯消毒による病害防除をした種子を使用する。
- ・薄播きによる健苗に努める。  
（乾燥粃で100 g～120 g/1箱）・・・（催芽粃で約160 gまで）
- ・育苗期間中の温度管理に注意をして、特に硬化期の後半から田植え前までは外気に慣らして健苗育成を図る。

### ◆ 荒耕し、代掻き

- ・荒耕しは、出来るだけ乾田状態で行う。（深耕は18センチを目安とする。）
- ・荒代掻きは、漏水をしないようにするため、畦際は特に丁寧に行う。
- ・ヒエ等雑草の繁茂が懸念される圃場では、荒代から5～7日程度間隔を空けて植え代掻きを実施する。
- ・植え代掻きは丁寧に行い、除草効果を高める。

### ◆ 施肥

- ・肥料は極力有機質50%以上の肥料を使用し、化学窒素量を10 a当り2.75kg以下とする。
- ・プラスチック流出防止の観点からそれを使用した一発型肥料は使用しない。  
（場合により、分施肥型肥料への転換を行う。）
- ・基肥は、窒素量で3.0kgを目安にできるだけ側条施肥で施肥をする。（有機物多用田では、減肥を検討する）
- ・中間施肥は、基本的に中干し前に使用して、根張りの向上を促す。
- ・分施肥型肥料体系で行う場合、穂肥は、有機質肥料のため、出穂前25日、幼穂長約0.5mmを目安に概ね窒素量2.0kgで行う。（生育状況を確認して肥料の量を調整すること。）
- ・ザルピオフィールドマネージャーを使用し、衛星写真による生育ムラを把握して、施肥マップを作製し、肥料の無駄を省き、肥料コストの削減と環境負荷低減を図る。

### ◆ 田植えと田植え後の水管理

- ・圃場条件にもよりますが、植え代掻き後3～4日後に田植えを実施する。
- ・植え付けは、一株当たり3～4本として、株間は23センチ程度で行う。
- ・田植え後、出来るだけ早急に「水位・水温センサー」を設置する。  
（極力水口付近には、設置をしない。）
- ・田植え後活着期までは、日中は浅水、夜は保温のため、深水管理とする。

## ◆ 体系処理による除草対策

- ・ 初中期除草剤の使用時期を確認して、使用前に十分な灌水状態としてから散布する。
- ・ 散布後3～4日間は水の出入りを止めて出来るだけ灌水状態を保つようにする。  
(水がなくなっても極端に干し上がらない限りこの間は入水は極力行わない。)
- ・ 中後期除草剤について、雑草の発生状況を確認して、遅れないように散布処理を行う。
- ・ 水の管理については、初期除草剤の使用時と同様に行う。

## ◆ 中干しの実施とその後の水管

- ・ 元気な根づくりと過剰生育の抑制、収穫作業の効率化のため中干しを実施する。  
水位センサーを活用し、適正な中干しを実施する。
- ・ 1株当たり平均22本確保が出来たら、中干しを開始する。
- ・ 中干し期間は7～10日程度として、併せて溝切も実施する。
- ・ 中干し終了後は、走り水を1～2回程度実施して、その後は間断灌水を行う。
- ・ 穂ばらみ期から出穂後25日までは、飽水管理とする。
- ・ 出穂後の気温が高い場合や高夜温、および水温が高い状態が続くときは、通水を行い水温を下げ乳白粒等の発生を抑制する。
- ・ 出穂期以降の水温に注意する。(「水位・水温センサーを細目に確認。)
- ・ 登熟期後半までは飽水管理として、その後は間断灌水を実施する。
- ・ 圃場の条件にもよるが、出穂後30日後に完全落水をする。  
(成熟期の多照による急激な乾燥が懸念される場合には通水を行い、胴割粒の発生を抑制する。)

## ◆ 防除

- ・ 農薬の使用基準は成分数8回以内として、決められた農薬以外は使用できない。
- ・ AIカメラによる病害虫発生予察を活用して適期防除に努める。
- ・ ドローン等を活用し、省力化に努める。
- ・ いもち、虫予防のため箱施用剤の使用。・・・ 【稲名人箱粒剤】
- ・ 除草剤体系 初中期・・・ 【ビクトリーz (ジャンボ又はFG剤又は1kg粒)】
- ・ 除草剤体系 中後期・・・ 【アトトリ (1kg粒又は豆粒)】
- ・ 本田防除 出穂前 (いもち、紋枯れ、カメムシ類)・・・ 【アミスタートレボンSE又はトレボン粉剤DL】
- ・ 本田防除 出穂後 (カメムシ、ウンカ類)・・・ 【スタークル (液剤10又は粉剤DL)】

## ◆ 適期刈り取り

- ・ 青味籼率10～15%で刈取りを行う。
- ・ 衛星写真等を活用し、生育状況に合わせ適期刈取を行う。
- ・ 適正な乾燥 (水分 14.0～15.0%に調整)  
(急激な乾燥は避けてゆっくりと実施する。・・・ 温度確認)
- ・ 網目は1.9mmを使用すること。